

佐土原キリスト教会 2023年7月30日 礼拝説教

聖書箇所：マタイ福音書5章4節

説教題：慰めに導く悲しみ

カナダの教会で、礼拝後の交わりをしている時、1人の方が日本で通っておられた教会の話をされました。その教会では喜びが強調されていたというのです。しかし彼は言われたのです。『喜び、喜び』と言うけれど、人生には、喜びばかりではない、悲しみがあるんだ、でもその悲しみこそが、信仰には大事なんだ。今日は「悲しみ」がテーマです。

水野源三という方がおられます。水野源三さんは、1937年、長野県で生まれました。小学4年の時、村に発生した集団赤痢で脳性麻痺になり、それ以来、首から下の体の自由、言葉の自由を奪われて、生涯(47歳で亡くなるまで)その状態で過ごされた方です。でも1冊の聖書を通して神に出会い、信仰を持ち、その後は、瞬きで家族に言葉を伝え、短歌や詩を書いて素晴らしい証の人生を全うされました。生涯に4冊の詩集も発行され、その詩集の発行は「現代の奇蹟」と呼ばれました。今朝の御言葉は「悲しむ者は幸いです。その人たちは慰められるから」(4)という一節ですが、水野さんのことを引用しながら、この御言葉の学びをしたいと思います。

前回「『山上の説教』には一見非常識に見えるような言葉がある」と申し上げましたが、この言葉も世の常識に反する言葉です。深い悲しみにある人に「幸いですね」等ということは、私達には出来ないことです。普通は「悲しまない人が幸い」だと言うでしょう。悲しみは不幸、少しでも悲しみ少なく生きることが幸い、ということになります。しかしイエス様は「悲しむ者は幸いです。その人たちは慰められるから」(4)と言われる。なぜ悲しむ人が幸いなのか。3つのことを考えましょう。

1. 悲しみが神の慰めに導く

なぜ悲しむ者が幸いなのか。「旧約『イザヤ書』61章」にやがて救い主(メシア)が来た時のことが預言されています。「主の霊が…わたしを遣わされた…すべての悲しむ者を慰め…悲しむ者たちに、灰の代わりに頭の飾りを、悲しみの代わりに喜びの油を、憂いの心の代わりに賛美の外套を着けさせるためである」(イザヤ 61:1~3)。やがてメシアが来られた時、悲しむ者が慰められると預言されているのです。「ルカ福音書」でイエスは「イザヤ 61章」を引用して「きょう、聖書のこのみことばが、あなたがたが聞いたとおり実現しました」(ルカ 4:21)と言われました。イエスが来て下さったことによって、悲しむ者が慰められることが現実になったのです。

イエス様のこの言葉を「人間の言葉」で見事に表現しているのが水野源三さんの「悲しみよ」という詩です。「悲しみよ、悲しみよ、本当にありがとう。お前がいなかったら、強くなかったら、私は今どうなったか。悲しみよ、悲しみよ、お前が私を、この世にはない大きな喜びが、かわらない平安がある、主イエス様のみもとに連れて来てくれたのだ」。水野さんは、「悲しみ」が自分をイエス様の御許に連れ行ってくれたという。そしてイエスの御許に「喜びと平安があった」と言うのです。イエスが言われた「その人は慰められる」というのは、正に「神(主イエス)によって慰められる」、「悲しみが私達に神の慰めを経験させる」ということだと思ふのです。「メッセージ訳」という英語の聖書は、この箇所を次のように訳しています。「あなたにとって最も大切なものを失ってしまったように感じる時、その時こそが、あなたは、あなたの最も大切な方から取り囲まれることが(抱き留められることが)出来るのです」(メッセージ訳)。水野さんは何を失ったのでしょうか。彼は健康な体を失いました。言葉を失いました。外の世界を失いました。人とのコミュニケーションを失いました。失ったものを上げれば切り無くあるでしょう。それは、私等がはかり知ること出来ないほどの大きな「悲しみ」だったと思います。しかし彼は、「その悲しみが、私をイエス様のところに連れて行ってくれた」と語るのです。そしてイエス様に出会うことが出来たことは、自分がかげがえのないものを失った、それに優る慰めであった、喜びであったと語っているのです。イエス様を知ることの慰め、それがどれほど大きな慰めであるか、私達は、与えられている恵みを、改めて感謝すべきかも知れません。

インターネットで、麻薬中毒とアルコール中毒でボロボロになっていた女性の証しを聞きました。どうにもならない悲しみの中で、「パッション」の映画を通して、イエス様の声を聞いたのです。「私を求めなさい。私があなたを救う」。映画を観終わった後もその言葉が響きました。そうやってイエス様と出会ったのです。そしてイエス様の慰めの素晴らしさを「こんな私をそのまま愛して下さった」と涙を流しながら訴えていました。「悲しみ」は、一方で辛い現実です。出来れば経験したくないことです。しかしまた一方で、そのようにして私達を神に導き、神の慰めに導くのです。

神に導かれることが、どんなに素晴らしいことか。「敵をもてなす」という証しでは、南米のある村を襲撃した軍隊の隊長が、1人クリスチャンを通してキリスト教に興味を持ち、村の礼拝に出て、自分が襲撃した村の人々に「よくいらっしやいました」と歓迎され、驚いてこう言うのです。「ここにいる人達は、皆、神を知っているのですか。もしそうなら、どんな時でも、神にすがりついて下さい。神を知るということは、この世で一番素晴らしいことに違いないと思う…私もいつかは『神を知っている』と言えるようになりたい」。神に導かれるということは、何ものにも代えがたい素晴らしいことなのです。だから、私達を神の慰めに、導いてくれる「悲しみ」を、私達は「幸い」と呼べるのではないのでしょうか。

また私達には、「家族を失う」という激しい「喪失の悲しみ」もあります。その時、本当に私達を慰めることができるのは、主イエスだけではないのでしょうか。マルタとマリアが、兄弟ラザロを失った時、彼女達は、主の「わたしは復活であり、命である。わたしを信じる者は、死んでも生きる」(ヨハネ 11:25)という言葉聞いたのです。私達がイエス様を知るなら、その悲しみの中で、生も死も御手の中に治めておられる方に希望を見出し、全てを委ねることが出来る、その慰めを思います。だからクリスチャンの葬儀は、悲しみはある、でも確かな希望がその場を覆うのです。

「悲しみ」は、私達を、本当の慰め、尽きない慰めの主である神に導く。そして、私達に神の慰めを経験させる。だから「幸い」なのです。そして神に出会った者は、その後やって来る様々な「悲しみ」の中でより深く神を知り、神の慰めを経験して行くのです。さらに言うと、「慰められるから」、この言葉は未来形です。「黙示録」に新しい天と地で「神ご自身が彼らとともにおられて、彼らの目の涙をすっかりぬぐい取ってくださる」(黙示録 21:3~4)とあります。私達が地上で悲しんだ分、それを補って余りある慰めが私達を待っているのです。だから「幸い」だと言われるのです。

2. 悲しみが救いに導く

「八福の教え」は全て「関節的な勧め(命令)」として受け止められる言葉です。ですから「悲しむ者は幸いです」(4)という言葉は「悲しむ者であれ」という言葉だと受け取ることも出来ます。つまりイエスは「悲しみなさい」と言われたことになる。何を「悲しめ」と言われたのでしょうか。

「聖書」の中でイエスが涙を流されたのは、ラザロの死を際して「人間の死の現実に涙された涙」と、もう1つは、都エルサレムに入る時に「神に背いている滅びる人々のために涙された」、その2回です。それは人間の罪に対する「悲しみ」だったのです。使徒パウロもこう言って悲しみました。「私は、ほんとうにみじめな人間です。だれがこの死の、からだから、私を救い出してくれるのでしょうか」(ローマ 7:24)。彼は、罪人の自分を悲しんだのです。「ヤコブの手紙」の中にも「悲しみ、嘆き、泣きなさい」(ヤコブ 4:9)という言葉がありますが、それも「自分の罪を悲しみ、罪を嘆き、自分の罪を泣きなさい」ということなのです。「聖書」は、「罪を悲しむように」と語ります。ですからイエス様が「悲しむ者は幸いです」(4)と言われた時、それは私達の人生で経験する様々な悲しみのことも言われているわけですが、中心となっているのは、「自分の罪を悲しむ」ということではないかと思われまます。

水野源三さんの詩にも、自分の罪を見つめた詩があります。「①御神のうちに生かされているのに、自分ひとりで生きています、思いつづける心を、砕いて、砕いて、砕きたまえ。②御神に深く愛されているのに、ともに生きる人を真実に愛し得ない心を、砕いて、砕いて、砕きたまえ。③御神に罪を赦されているのに、他人の小さなあやまちさえも、赦し得ない心を、砕いて、砕いて、砕きたまえ」。水野さんも、神を知る中で、自分の罪を示され、自分の罪を悲しんだのです。私達は「砕きたまえ」と祈るほど、

自分の罪を悲しんでいるのか。探られます。

しかしイエスは、「(罪を)悲しむ者は幸いです。その人たちは慰められるから」(4)と言われたのです。イエス様が伝道生涯の最初に言われたのは「悔い改めよ。天の国は近づいた」(マタイ 4:17)という言葉でした。罪を悲しむことがなければ、悔い改めることは出来ないのです。罪を悔い改めることがなければ、「天の国(『神の国』)」が自分のものにならないのです。

私は「(罪を)悲しむ者は幸いです。その人たちは慰められるから」(4)、この「慰め」を上手く説明することは出来ませんが、自分の体験をお話することは出来ます。しばらく前もお話しましたが…。私は、学生時代、人間関係の問題で行き詰まって恐れていた時、「すべて、疲れた人、重荷を負っている人は、わたしのところに来なさい。わたしがあなたがたを休ませてあげます」(マタイ 11:28)の言葉に導かれて、助けを求めて近くの教会に飛び込みました。教会の玄関を出た瞬間、私の心に「神が守って下さる」という思いがやって来て、実際守られました。それで7年ぶりに教会に通い始めました。しかし私にはキリスト教信仰がよく分かりませんでした。助けを求めて教会に行った。そして助けられた。ではその後、何があるのか、それが分かりませんでした。そして神と個人的に結びついている実感がない、天国の実感がない、恵みが分からない、そういう感じでした。そんな時、私は仕事の上で失敗をして沢山の人の迷惑をかけました。そうやってやっと「自分は罪人だ」ということが分かった、というより分からせてもらったのです。それは本当に悲しい、苦い出来事でした。その「悲しみ」を持って神様に赦しを請うて祈りました。その時、私は、教会を通して「神の赦し」を体験したのです。その時から「神の恵み」が分かるようになりました。神様を、神様の恵みを、身近に感じるようになったのです。本当に幸いな、人生にとって決定的な出来事でした。

皆さん、それぞれに経験をお持ちだと思うのですが、私は自分の貧しい経験から、私達を決定的に神に結びつけ、「神の国」に結びつけるもの、それは「罪を悲しみ、悔い改めをなし、その中で神の赦しを受け取る」ことだと思っています。先程の麻薬中毒の女性も、「イエス様にあなたの罪を告白して下さい。イエス様が愛して下さいます。救いがやって来ます」と訴えていました。「包帯を巻くつもりがなければ傷に触るな」という言葉を聞いたことがあります。イエス様は「十字架の苦しみによって私達の罪を贖う」という方法で私達の傷に包帯を巻くつもりがあったから、人間の一番の問題に向かって「罪を悲しむ者であれ、そして悔い改める者であれ」と声を上げられたのです。その時に、人は神と和解することが出来るのです。生涯、神の慰めを頂いて生きることが出来るようになるのです。「イザヤ書では『慰め』と『救い』と同義語」です。その時、「慰めが来る」、「救いがやって来る」、「天国への道が開かれる」のです。

そしてそれは、「私はもう赦されてキリスト者になったのだから、それで良い」ということではないでしょう。「ちろば先生物語」という本の中にこんなエピソードがあります。神学校で学んでいた主人公の榎本先生は、先輩の牧師から「君には罪が分かっていない」と言われます。彼は怒ります。「信仰の一番の基本ではないか。それが分かっていないとは言い過ぎではないか」。牧師は言います。「君は、誰にも知られたくない罪を人に告白出来るのか」。牧師は「人に知られたくない罪を告白しなさい」と言っているのではないのです。罪は神に告白すれば良いのです。しかし「罪は神にだけ告白すれば良い」ということを安易に考えて、自らの罪の深さ、罪の恥ずかしさ、それと真剣に向き合うことを、どこかでいい加減に考えていた榎本青年に「神に罪が赦されるということがどれほど重大なことなのか」、それを理解して欲しかった。「そうでなければ本当の新生は出来ない」ということを言いたかったのです。榎本青年は悩みに悩んで、結婚を申し込んでいた女性に「自分が戦時中に中国でどんなことをしたのか」、「結婚お断り」の返事が来ることも覚悟で手紙を書きました。返事が来ました。「母が『ほんまにキリストの赦しを喜んでいるお方や』と言って励ましてくれました」。その時、榎本先生は畳にひれ伏して心の底から神の名を呼ぶのです。その時、「子よ、汝の罪、赦されたり、安らかに行け」(マタイ 9:2)という神の言葉を聞くのです。神の慰めを経験するのです。

私達は自分の罪を誰かに告白するようにして、そんな思いで罪を神に告白し、悔い改めをしているの

か。イザヤは言いました。「先の事どもを思い出すな。昔事どもを考えるな。見よ。わたしは新しい事をする。今、もうそれが起ころうとしている。あなたがたは、それを知らないのか。確かに、わたしは荒野に道を、荒地に川を設ける」(イザヤ 43:18-19)。この言葉を新約の光で見ると「かつて救われた時の経験にしがみつくな。主は何度でも、あなたに新しい救いの(慰めの)経験を与えて下さるのだ」という意味です。お互い、信仰を持っていても、神の目から見たら罪にまみれた生活だと思えます。聖なる神の前の不完全さ、汚さ、そのことに目を向け続けるべきです。そして悲しむべきです。その時、神は、罪を悲しむ者に、「赦し」を、「慰め」を、新たに語って下さるのです。

3. 悲しみが愛に導く

水野源三さんの「悲しみよ、ありがとう」というビデオの中に小学3年の「一秀君」という少年と水野さんとの出会いが描かれていました。彼は小さい時から色々な病気に悩み、水野さんに出会う少し前も辛い状況にありました。クリスチャンであるお母さんから源三さんのことを聞いた一秀君は、「水野さんに会いたい」と言って、お母さんに連れられて水野さんを訪ねました。以下、ビデオを紹介する本から抜粋します。「源三さんは、訪ねて来た小さなお客さんに語りかけることは出来ない。だが一秀君の持つ苦難の意味を一番良く知っているかのように、慈愛に満ちた目で一秀君を優しく迎えた。ジッと食い入るように源三さんを見つめる一秀君。その一秀君に、源三さんは、瞬きで、こう語りかけた。『他の人と、比べないようにして、生きて行って下さい』」。

イエスは「悲しむ者は幸いです。その人たちは慰められるから」(4)と言われました。「悲しむ者」という言葉には「悲しむことが出来る者」というニュアンスがあるのです。イエス様は「人のために悲しむことが出来る人は幸いです」とも語られたのではないのでしょうか。いや、そのような「悲しみ」に私達を招いておられるのではないのでしょうか。確かに人の悲しみを自分の悲しみにすることは難しいです。愛の貧しさを嘆かざるを得ない者です。それでも、私達も、自分の経験した悲しみを通して、同じような悲しみを悲しんでいる人を心から慰めることが出来るのではないのでしょうか。「泣く者と一緒に泣きなさい」(ローマ 12:15)。私達がもし「他の人のために心から悲しむ」ことが出来るならば、その「悲しみ」を通して、私達はイエスの願われる「愛の生き方」に踏み出すことになるのではないのでしょうか。その意味で「悲しみ得る者」でありたいと願いますし、その私達を、イエス様は「幸いです」と言って下さるのです。私達自身の悲しみは、やがて主が、その悲しみを補って余りある慰めで包んで下さるにちがいありません。